

論文審査の結果の要旨

氏名：五十嵐 愛

博士の専攻分野の名称：博士（心理学）

論文題名：慢性統合失調症者におけるぬり絵を用いた縦断的な臨床心理学的検討

審査委員：（主査） 教授 津川 律子 ㊞

（副査） 教授 横田 正夫 ㊞ 教授 岡田 和久 ㊞

本論文では、日本における精神科臨床の現状において、慢性統合失調症者のリハビリテーションの素材として使用されている「ぬり絵」を、心理アセスメントの1つとして活用することを目的に、ぬり絵の特徴から、慢性状態にある統合失調症者の状態や、状態の変化を把握しようと試みた実証的な臨床心理学研究である。

具体的な目的は次のとおりである。(1) ぬり絵課題を作成し、信頼性（評定者間信頼性・再検査信頼性・ α 係数）を検討すること、(2) ぬり絵特徴（部分・全体）とオックスフォード大学版 Brief Psychiatric Rating Scale（以下,BPRS）による精神症状（全体的精神症状・陽性症状・陰性症状）との関連を明らかにすること、(3) ぬり絵特徴（部分・全体）と背景要因（年齢・罹患期間・Kohs 検査の IQ）との関連を検討すること、(4) 対象者の状態の変化を把握するため、ぬり絵の全体的特徴の継時的な変化を明らかにすること、(5) ぬり絵課題と臨床実践のなかで使用されている他の心理検査を組み合わせ実施し、各課題に表現される特徴の差異を検討することにより、ぬり絵の特長を検討することである。

第I部「序論」では、本論文の研究背景や先行研究について4つの章に分けて整理している。第1章「慢性統合失調症の問題と背景」、第2章「統合失調症者を対象とした臨床心理行為」、第3章「慢性統合失調症と描画法」、第4章「慢性統合失調症とぬり絵」である。

この第I部を踏まえて、第II部「慢性統合失調症者におけるぬり絵特徴の理解」では、4つの研究が行われている。第5章では、目的(1)を検討している(研究1)。7枚の刺激図条件と3種類の彩色道具条件を設定し、条件間の質的特徴の出現数の差を比較した結果、本論文の目的を検討するためには、性質の異なる2枚の刺激図（幾何図形・子犬の絵柄）に色鉛筆で色を塗る課題（二枚ぬり絵法）を使用することが相応しいことが明らかとなった。第6章では、二枚ぬり絵法の部分的特徴に着目し、慢性統合失調症者（以下、S群）と健常者（以下、N群）を対象として、目的(1)の信頼性及び(2)と(3)について検討している(研究2)。その結果、評定者間信頼性は十分な値が示され、再検査信頼性の結果からは、個人内の表現が安定している項目と変化しやすい項目があることが認められた。S群とN群の部分的特徴の出現数の比較結果より、S群は刺激図全体を配慮して部分要素に色をつけられず、これらは全体的特徴に繋がる部分的特徴であることが仮定された。そして、N群は年齢が一部の部分的特徴を予測するのに対し、S群の年齢・罹患期間は部分的特徴から独立し、Kohs 検査の IQ が一部の部分的特徴を予測することが示された。さらに、一部の部分的特徴はBPRSの評価による全体的精神症状得点・陽性症状得点・陰性症状得点を予測することが認められた。これらの結果から、二枚ぬり絵法はS群の状態把握を目的とした臨床的利用ができる可能性が示唆された。第7章では全体的特徴に着目し、目的(1)の信頼性及び(2)と(3)について検討している(研究3)。その結果、評定者間信頼性と再検査信頼性の値は十分であった。因子分析の結果、二枚ぬり絵法の全体的特徴を示す因子は「不整合性」、「運動性」であることが示され、これら下位尺度得点の α 係数は高い値を得た。続いて、分散分析の結果、N群は刺激図間で不整合性の印象に差がないのに対し、S群は幾何図形よりも子犬の絵柄において不整合性の印象が高く、運動性の印象は両群に差がないことが示された。ここから、S群は子犬の絵柄において不整合性の印象が高まり、運動性の印象は両群に差のない指標であることが認められた。そして、部分的特徴と共通してN群では年齢と一部の下位尺度得点に関連するのに対し、S群の年齢・罹患期間は全体的特徴から独立し、各下位尺度得点とKohs 検査の IQ が関

連することが示された。さらに、子犬の絵柄における不整合性尺度得点は BPRS の評価による全体的精神症状得点・陽性症状得点を予測し、運動性尺度得点は陰性症状得点を予測することが認められた。ここから、二枚ぬり絵法を継時的に使用することにより、S 群の状態の改善・悪化を跡づけられることが仮定された。第 8 章では、目的 (1) の信頼性及び(4) が検討されている (研究 4)。その結果、評定者間信頼性と各下位尺度得点の α 係数の値は十分であった。2 刺激図における各下位尺度得点の個人の継時変化の推移を検討すると、転帰研究で見出されている安定群・固定群・変動群のうち、変動群に相当すると思われる対象者が多く存在していることが見出された。また、全体的特徴が増悪する事例 A も出現し、A の診療記録と照合したところ、全体的特徴の変化は A が対象喪失を経験した後に生じていることが明らかであった。

第 III 部「慢性統合失調症者の個人的特徴の理解—テストバッテリーを用いた事例検討—」(第 9 章)では、目的 (5) が検討されている (研究 5)。3 つの事例を対象に、二枚ぬり絵法・彩色樹木画・ロールシャッハ法を組み合わせて実施した結果、各課題に表現される特徴は個人内において共通する側面が認められた。その一方、第 II 部の対象者の精神症状得点と比べると、やや重度に位置する事例であっても、二枚ぬり絵法では N 群で認められる水準で彩色可能である人も存在していた。この結果は、二枚ぬり絵法が簡便であるため、慢性統合失調症者であっても健康な側面を表現できる余裕が残されていることによると考えられた。そして、彩色樹木画では樹木画を描かず、ロールシャッハ法においては状態把握のための有益な情報を得ることが困難と判断される事例であっても、二枚ぬり絵法は実施可能で、この事例の精神症状得点とぬり絵特徴の対応は、第 II 部の結果を支持していた。

最後の「総合考察」(第 10 章)では、本論文の検討によって明らかになった結果に基づき、二枚ぬり絵法の臨床的利用に向けた示唆を論じている。本論文における研究結果から、ぬり絵はリハビリテーション課題としての利用のみならず、精神症状の程度を大まかに把握することができ、慢性状態にある統合失調症者を対象とした心理アセスメントの一課題として使用可能であることが示唆された。慢性統合失調症者の治療のなかに二枚ぬり絵法を導入することにより、行動観察からは把握することが難しい状態の変化を見逃すことなく捉え、有効な治療に本課題は寄与することとなるだろうと結論づけている。

本論文は、これまで心理学的な方法を使用して状態変化を捉え難かった慢性統合失調症者に対して、臨床心理学が行えることの可能性を拡大した点は何よりも評価される。血液検査や尿検査といった明確な値で状態像を捉えることができないなか、ぬり絵が対象者の状態像を捉えることができ、また、その変化も捉えることができるとすれば、精神科臨床が質的に向上する可能性が生じる。しかし、本論文をそのまま精神科臨床にすぐ適応できるかといえ、描画法研究としてまだ課題が残っているものと思われる。たとえば、慢性状態を抜け出る改善指標として、ぬり絵にどのような特徴が考えられるのかといった点については、今後の課題である。研究の継続が望まれる。

以上の成果は、臨床心理学領域における学識の深さと新しい心理学的研究を遂行する能力の高さを示すものであり、申請者が専門的な職務に従事するための十分な資格を有していると判断される。

よって本論文は、博士 (心理学) の学位を授与されるに値するものと認められる。

以 上

令和 3 年 1 月 8 日